

[シンポジウムⅡ]

移動する人びとをどう描くか

——ブルガリア出身者の労働移動調査からの問題提起¹——

松前 もゆる

はじめに

フィールドワークの過程で、ふとした瞬間に印象に残る言葉を耳にすることがある。そのときにはなぜその言葉がそれほど気になるのか明確にできないことも多いのだが、まずはフィールドノートに書き留める。しかし、しばらく経つと、それが研究に関わるキーワードを含んでおり、研究上の「問い」につながると気づかされることは少なくない。

後述するように、筆者がブルガリア中北部の村からイタリアやギリシア、イギリス、フランスといった諸外国への出稼ぎ労働者、殊に単身で移動する女性たちに焦点をあてて調査をするようになって10余年が経つ。その過程で印象に残った言葉のひとつに、2016年夏、イタリアで家事やケアの仕事に従事するアナ²にインタビューをした際の、次のような発言がある。

自分の選択に後悔はない。だって、ブルガリアにいたら、私のような50代の女が、とくに夫がいなければ、子どものことだけじゃなくて、自分のことも考えることなんてできないもの。

アナは1960年代前半にブルガリア中北部A村で生まれ、B村出身の男性と結婚をして、2人の子供をもうけ、B村で暮らしてきた。その間B村内で働いてきたのだが、社会主義体制崩壊後に夫が失業をしたこと、自身の給与は低く、一方で子どもたちが成長して教育にお金がかかるようになったこと等から、2005年以来イタリアで家事や高齢者ケアの仕事に従事するようになっていた。アナにはこれまでも何度か話を聞いていたが、2016年にイタリアで短期調査をした際、彼女の暮らす都市でのインタビュー中に「ブルガリアが恋しくはないですか？」と聞いたところ、「親しい友人のことは恋しいけれども」と話した後で、上記のように続けたのだ。なお、この10数年の間に彼女は夫と別れ、また、子どもたちは当初ブルガリアに残っていたが、数年前からイタリアで暮らすようになっていた。

このアナの発言をひとつのきっかけとして、その後筆者は、ブルガリア（出身）女性たちが「シングルで生きる」ことについて考えるようになった。そして、ブルガリ

アの村においては、女性が単身で生活を成り立たせることは経済的および社会的に困難である一方、諸外国への出稼ぎが、女性たちに「シングルで生きる」という新たな選択肢をもたらしているのではないかと指摘した (cf. 松前 2017)。ただ、研究会などでこうした内容の話をするにつれ、その後に頂戴する質問やコメントから推測するに、筆者の描き方では、女性たちが選択する主体であるという側面だけが強調されてしまっているのではないかと感じるようになった。

1980年代半ば頃から先進諸国のケアや家事を担う人材が不足するようになり、世界各地で女性たちの国際労働移動が目立つようになる現象は、「移動の女性化 (feminization of migration)」と言われる。こうした女性たちは、これまで「グローバル経済の犠牲者」として描かれることが比較的多かったと言えるが、近年では、女性たちの主体性に注目する論考も数多い。ただ、移民について人類学者の大川真由子が、「彼らはマイノリティや被抑圧者としてのみ存在してきたわけではない。かといって、彼らの主体性を強調するあまり、過度に能動的な人びとであると過大評価されるべきでもない」(大川 2016: 535) と述べているように、彼女たちを犠牲者、弱者としてのみ描くのも一方的であるし、主体性を過度に強調するのも片手落ちであろう。では、移動する人びとの持ついずれもの側面を描くにはどうすればよいのか。果たしてそれは、どのように可能であろうか。

本報告では、上記のような問題意識に立ち、まず、筆者の労働移動に関するフィールドワークの概要を示したうえで、彼／彼女たちをどのように描くことができるかについて、エスノグラフィをめぐる最近の論考、および移動とジェンダー研究の流れをふまえ、ひとつの試案を示したい。

1. フィールドワークの概要

筆者は、ブルガリア中北部ロヴェチ県の主に2つの村、A村とB村で、1997年から継続的にフィールドワークを行ってきた。ただ、国際労働移動に関心を向けるようになったのは、調査当初からではなく、その過程においてである。というのも、ブルガリアのEU加盟が決まり、EU諸国への渡航に際しビザが不要となった2001年以降、ブルガリアからヨーロッパ各地への労働移動が急増したからである。A・B両村からも、男性たちがドイツやスペインの建築現場へ出稼ぎに行き、また、季節労働(農作業)のため、ギリシアやイタリア、フランスといった国々へ夫婦や友達同士で連れ立って出かけるようになった。同時に、ギリシアやイタリアで家事や介護の仕事をする40-50代の女性たちの姿も目立ち始めた。

こうした国外で働く者の増加、殊に女性たちの国境を越える出稼ぎについてA・B両村の人びとは、体制転換後の「新しいこと (нещо ново)」と語った³。こうしたことから女性の国際労働移動に関心を惹かれ、ブルガリアのEU加盟(2007年)前の

2006年頃から、休暇等で村へ戻った女性たちやその家族からの聞き取りを開始したのである。その後はほぼ毎年ブルガリアを訪問し、断続的・継続的に聞き取り調査を実施してきた。さらに、2016年6月と7月には、A・B村出身者の移動先のひとつであるイタリア北西部でも短期のフィールドワークをおこなった。

以上のような調査から筆者は、「新しいこと」としての女性の単身での出稼ぎが、ブルガリア地域社会のジェンダー規範や仕事観、ライフコースにいかなる影響をもたらすかについて、これまで検討を続けてきた (cf. 松前 2016, 2017 ; Matsumae 2018)。その結果、例えば、仕事とジェンダーをめぐる規範には、①仕事の内容面での性別分業規範、②収入の優位性 (稼得役割) に関する規範、③働く場所にかかわる規範、という複数の側面があり、外国で家事や介護の仕事に従事する女性たちについては、②③に関しては従来の規範と合致しないが、家事やケアに携わるという点で①は維持されており、ジェンダー規範のある部分を揺るがす行為も、別の部分で規範にそうかたちで再解釈され、容認されてきたことを指摘した (松前 2016)。②の働く場所とジェンダーに関して言えば、国境を越えて労働移動をする女性たちは、出国を決めた際、30代後半から50代くらいの、その大半が10代の子どもを持つ母親であり、子どもをブルガリアに残して移動することには、批判も根強い。また、③の収入の優位性については、社会主義時代に女性の社会進出が進んだものの、男女の賃金格差は残り、男性の方がより多く稼いで家計を支えるものだという通念が維持されてきたため、夫婦間の収入の逆転につながり得る女性の国際労働移動は、人びとを困惑させている。しかし、A・B両村出身の女性たちが、この10年程、ギリシアやイタリアなどへの出稼ぎを続けてきたことは紛れもない事実である。

ときに非難をされつつも国際労働移動をする理由として、当事者である女性たち、そして周囲が共通して強調するのが、「子どものため」ということである。先にあげたアナのケースも含め、女性たちは、子どもの教育費や家族の生活費が足りず、そのために出稼ぎを決めたと語る。こうした状況は、グローバル経済下で家族の成功のための負担が女性により重くのしかかっている「サバイバルの女性化」(Sassen 2000) や、グローバル経済の「従僕 (servants)」としての移民女性 (Parreñas 2015)、あるいは、母親としての犠牲といった指摘と重なり合う。

一方で、例えばモルドヴァからトルコへの女性の出稼ぎについて Keough が指摘したように、女性たちは働き続けることで家族内での発言権を維持している面がある (Keough 2015)。筆者のフィールドワークからも、女性たちが母として出稼ぎを選択していることは明らかだが、家族へ送金し、その生活や子どもの教育を支える実践は、彼女たちの家庭内での地位を確固たるものにする傾向がみえてきた。さらに、上述のアナの言葉にあるように、彼女たちは「子どものこと」はもちろんのこと、「自分のこと」も考えて生きているのであって、単なる犠牲者として描くのは一方的であるが、無論、

すべてを主体的に選択する／できるわけでもない。

こうした彼女たちの姿をどのように描くことができるか、次に、エスノグラフィに関する最近の論考にふれたうえで、それを参考にしつつ、さらに考えてみることにしよう。

2. エスノグラフィをめぐる模索

筆者が専門とする文化人類学では、古典的なフィールドワークとそれにもとづいてエスノグラフィを書くことへの批判が、1980-90年代頃から盛んになされてきた。しかし、「表象の危機」の時代を経て、近年、方法論としてのフィールドワークやエスノグラフィへの関心が、さまざまな分野で高まっているように思われる。

『現代思想』2017年11月号ではエスノグラフィの特集が生まれ、その責任編集を担った社会学者の岸政彦は、同誌上での哲学者・國分功一郎との討論のなかで次のように語っている。

行為を描くとき、状況に還元して書くか、状況から切断して書くか、そこが問題なんです。[……] 前の時代の客観的な書き方に対する批判を受け継いで、それに巻き込まれる自分もそのなかに入れて書くのですが、やはりどういう描き方をするとせよ、状況のなかで行為が生まれるという書き方をしてしまいます。それはそれで政治的な意図があるのですが、それにしても行為を安易に状況や構造とつなげて描いてしまうと、責任や能力がどこかへ行ってしまう。(岸・國分 2017: 45)

私たちは過去よりも社会的状況や属性のほうに行為を結びつけて考えるのだけれど、それをしてほしくない人もたくさんいるのです。[……] 社会的状況に結び付けずに行為を書くことも暴力だと思ふし、社会的状況や属性に還元して書くことも暴力です。(岸・國分 2017: 63)

ここでは、前節で提起した問いが、行為を描くときに社会状況や属性に還元するか、あるいは、状況に結び付けることなく、個人の選択と責任に帰するのか、というかたちで提起されている。岸は討論の中で、そのいずれもの手法が「暴力」であるとして、「かわいそう」でも「たくましい」でもなく、「私たちはそのあいだで書くんです」(岸・國分 2017: 63) と述べているが、その含意をより具体的に理解するために、討論でも言及されている岸の「鍵括弧を外すこと」(岸 2015) と題された論文にふれておこう。

この2015年の論文で岸は、聞き取り調査の方法論、聞き取りからいかに他者を書き、解釈するかをめぐる論争の歴史をまとめ、そのうえで自身の立場を明らかにしている。ここでとりわけ困難な問題として取り上げられるのは、社会問題、あるいは被

差別の当事者が自らの状況を否認するようなことを語る時、つまり、当事者たちが「自分は差別されたことがない」と語る場面である。この彼／彼女たちの行為に対し、被差別部落などを調査した社会学者の八木晃介は、人びとは差別的構造によってそれを認識する能力を剥奪されているのだとした。それに対し、ライフヒストリー調査を中心的な手法とする谷富夫は、例えば沖縄から本土へ出稼ぎに出て、後にUターンをした人びとの生活史について、差別されたからではなく、故郷の共同体への愛着から戻ったのだという風に、「語りを、そのまま理由として『鍵括弧を外して』採用」（岸 2015: 193）した。岸によれば、八木は語り手の合理性や能力を（差別構造を理由としているとは言え）否定し、谷は、語り手を尊重しつつも、彼／彼女にとって明示的な被差別の体験がなかったと解釈することで、差別構造の存在を弱めてしまっている。他方、日本のライフヒストリー研究を代表する1人である桜井厚は、対話的構築主義を提唱し、語り手が「何を語ったか」ではなく、「いかに語ったか」を重視する。この場合、一方的な一般化や引用符の解除は暴力であるとされ、「差別されたことがない」という語りから、差別があったか否かを叙述することはできなくなる。これを岸は、「語りを鍵括弧の外に出すことができなくなってしまった」（岸 2015: 198）と指摘する。

当事者の語りをいかに書き解釈するのかをめぐる、以上のような論争をふまえたうえで、では岸自身はどのような方法をとったのか。沖縄で聞き取りをおこなってきた岸は、実際、多くの人が本土で「差別されたことはありませんでした」と語る場面に遭遇する。このことに対し、岸は、語り手は明示的なかたちでの差別をされたことはなかったのだと判断するとともに、差別されたことがないにもかかわらず沖縄へのUターンを選んだとすれば、「むしろそちらのほうが本土と沖縄を隔てる壁が高く厚いということではないだろうか」（岸 2015: 206）と問う。語り手を尊重しつつ、同時に差別が存在することの重大性を棄損しないために、自身の理論に変更を加える道を選んだのだ。岸は、次のようにまとめる。

いずれにせよ、私が示したかったのは、語り手の否定でも、構造の否定でも、あるいは事実性の否定でもない、「第四の道」である。むしろ私たちは、事実性への回路を残したまま、理論の側に変更を加えることで、現実に対するさまざまな記述可能性を確保することができるのである。

このような、（語りではなく）現実に対する多様な記述可能性をできる限り保証することによって、[...] 人びとの、歴史や文脈、生活世界や意味付け、動機や理由などを、つまりその「合理性」を再び記述することができる。[...] 人びとの合理性をもういちど記述するために、その人びとがどういう存在で、どういう状態にあるのかを、私たちは書かなければならない（岸 2015: 206）。

一見不合理な行為に見えても、それぞれに「合理性」があることを示すためには、個人の語りや実践を丁寧に描くと同時に、社会構造についても当然描く必要がある。そうすることで私たちは、状況や属性にすべてを還元するのでも、個人の主体性を過度に強調するのでもなく、その「あいだ」で書くことが可能になる、ということであろう。では、移動する人びとを「かわいそう」と「たくましい」の「あいだ」、構造的「弱者」「犠牲者」と主体性の過大評価との「あいだ」で描くためには、具体的にどのような手法があるだろうか。次節でさらに考えてみたい。

3. 移動する人びとをどう描くか？

移動する人びとを社会的状況や属性に還元して描くか、個人の主体性を強調するかという問いは、国際移動とジェンダーをめぐる研究動向とも関係する。国際移動研究においてはある時期まで、「移動する人びと＝男性」という暗黙の了解があったが、1970年代から80年代にフェミニスト視点からの移動研究が登場し、さらに、1980年代半ば以降は、女性による労働移動の増加により、女性たちの移動が注目され始める⁴。その後、ジェンダー視点からの国際移動研究が盛んにおこなわれるようになるが、そのなかでは、ジェンダー化された国際移動の構造分析とともに、「犠牲者」として描かれがちな移民女性たちを、「移動を通して変化を自ら生み出していくような動的な主体として把握しようとする研究が、特に人類学の分野において活発化」（小ヶ谷 2007: 250）した。こうした視点にもとづくエスノグラフィは、従来の研究が移民女性の受動性や無力さを強調してしまう傾向にあったことを批判し、女性たちの戦略や主体性を鮮やかに描き出した（cf. Constable 1997）。

しかし、日本人男性と結婚したフィリピン出身の女性について調査を続ける高谷幸は、近年の論考で、従来の議論では女性たちの自律性やエージェンシーを強調してきたが、「エージェンシーは、構造的な制約のもとで発揮されるもの」であり、「いくつかの例外をのぞいて、これまでの研究は、国際結婚女性が犠牲者と見なされることを批判するあまり、彼女たちがおかれる構造的な位置に着目することをないがしろにしてきたのではないだろうか」（高谷 2018: 53）と述べる。女性たちが構造に従属する、受動的な「弱者」「犠牲者」としてのみ描かれてきたことが批判にさらされ、彼女たちの主体性や自律性が強調されるようになったが、近年ではさらに、主体性の過大評価が問題となっている。

こうした議論は、ネパールの女性たちとの対話にもとづいてまとめたエスノグラフィにおいて、佐藤斉華が提起した問題とも重なる（佐藤 2015）。佐藤は、インタビューで聞き取った語りからネパール女性たちの生を理解しようとするが、これまでのエージェンシーをめぐる議論の中では、周縁化された人びとにエージェンシーが「あった！」と結論することが目的化していると批判する。そして、むしろエージェンシー

がどのような社会的条件や規制のもとで、どのような強度や方向性をもって行使されたのかを問うべきであると主張する。このエスノグラフィの最後では、「常に既に社会的である個々人の行為の個人性・能動性を取り出すために、その行為がいかに社会的であり受動的であったかを掘り起こしてきた」（佐藤 2015: 276）とされており、佐藤の提案する、エージェンシーに働きかけ、これを生成・規制する「社会的諸力」のありように関する人類学（あるいは社会学）が、社会構造の制約と個人の主体性を同時に描こうとする試みであることが明らかとなる。佐藤の手法は、移動する人びとをテーマとする場合にも、彼／彼女たちをどう描くかを考える際、示唆に富む。

ただ、筆者自身のフィールドワークにもとづき、社会構造による制約と移動する人びとの主体性の双方を書くもうひとつの方法として、ある程度の時間経過を視野に入れて人びとを描くことを提案したい。というのも、国際労働移動についてはほぼ毎年のようにブルガリア出身女性から聞き取りをしていると、彼女たちの語りや実践が、取り巻く状況に応じて変化していることに気がつくからである。その語りや実践には、ときに社会構造上の位置やそれにともなう制約が強く影響するが、また別のときには個人の巧みな戦略が見え隠れする。

例えば、本報告の冒頭でとりあげたアナは、2016年にインタビューをした際には、イタリアへの出稼ぎという選択を「後悔はない」と言い切ったが、2018年夏に会った際には、子どもとの関係に悩んでおり、その語りには多少の変化がみられた。先に、2016年の調査時点で、アナの子どもたちは2人ともイタリアで暮らしていたと述べたが、実は、子どもの1人は既にブルガリアへ戻っており、将来の展望に関しアナとは意見が合わなくなっていた。一方、出稼ぎ当初、ブルガリアに子どもを残して移動したことを子ども自身からも非難され、日々葛藤していたことを話してくれたB村出身の女性は、その後、子どもがブルガリアの高校を卒業し、母親を頼ってイタリアへ来て働き出したことで、将来的にもイタリアで暮らすことを考え始めたと言った。A・B村から国際労働移動をする女性たちは、「子どものため」に母親として移動を選択しているという面は否定できず、従って、子どもとの関係が変化をすれば、出稼ぎをめぐる語りや実践は充分に変わる可能性がある。彼女たち自身、主体的な選択をしたことを強調するときもあれば、社会構造上の制約から、その行動や選択が制限されている現状を強くにじませる語りをするときもある。

こうした事例から、ある一定期間にわたってフィールドワークを継続し、それにもとづいて描くことで、移動する人びとの主体性とそれを制約する社会構造の双方を視野に入れる、その「あいだ」で書くことが可能になるのではないかと、現時点ではそのように考えている。

4. 結びにかえて

本報告では、筆者のフィールドワークをもとに、移動する人びとをどう描くことができるかを考えてきた。そして、これまでの関連する議論をふまえつつ、移動する人びとが、社会状況や社会構造的な位置・属性に従属的で受動的な存在である側面と、選択し移動する主体である側面の双方をともに描くためには、ある程度の期間にわたってフィールドワークを行い、変化する語りや実践について書くというやり方があり得るのではないかとの試案を示した。

付け加えるなら、この提案には、筆者がブルガリアからの国際労働移動をテーマとしてフィールドワークを始めてから既に10余年が経過していることも関係する。なぜこれほど時間がかかっているかと言えば、筆者の仕事が遅いためでもあるが、日本での勤務状況によって、大学院生時代のように長期の滞在調査を実施することが困難となり、短期調査を断続的に繰り返さざるを得ないためでもある。フィールドワークの方法は、調査する地域の環境や社会のありよう、対象とする人びとの事情およびそこでとり結ぶ人間関係等から影響を受けるのはもちろんだが、それだけでなく、調査者の側のライフステージの変化やフィールドワーク以外の仕事の状況によっても変化し得る。

ただ、本報告で示した移動する人びとを描くための視角は、あくまでひとつの試案である。今後、実際にこれを試みて、そのうえでさらに、自身のフィールドワークのあり方と、それをどのように書くかについて検討を続けたい。

注

- 1 本稿は、日本スラヴ学研究会でのシンポジウム「中・東欧地域におけるフィールドワークから／を考える」(2018年6月30日、於:東洋大学)での報告にもとづくものであるが、その後に実施したフィールドワークで明らかになったこともふまえ、内容を若干修正した。なお、当日の発表題目は、「フィールドワークからどう描くか? —— 労働移動調査からの問題提起 ——」であったが、本稿の内容により即したタイトルにあらためた。
- 2 個人名はすべて仮名である。
- 3 村からの国際労働移動に、前例がなかったわけではない。社会主義時代には、村の男性たちが国営企業経由で旧ソ連や中東へ働きに行っており、また、1990年代には、ブルガリア系ユダヤ人を頼ってイスラエルへ出稼ぎに行く者が現れた。体制転換直後でブルガリア経済が不安定であったため、この中には、少数であるが女性も含まれていた。
- 4 「国際移動とジェンダー」に関する、フィールドワークにもとづく研究のレビューは、小ヶ谷(2007)に詳しい。

参照文献

- Constable, Nicole. 1997. *Maid to order in Hong Kong: Stories of Filipina workers*. Ithaca: Cornell University Press.
- Keough, Leyla J. 2015. *Worker-mothers on the margins of Europe. Gender and migration between Moldova and Istanbul*. Bloomington: Indiana University Press.
- 岸政彦. 2015. 「鍵括弧を外すこと —— ポスト構築主義社会学の方法論のために」『現代思想』(2015年7月号) 43(11): 188–207.
- 岸政彦・國分功一郎. 2017. 「[討議] それぞれの小石 —— 中動態としてのエスノグラフィ」『現代思想』(2017年11月号) 45(20): 42–63.
- 松前もゆる. 2016. 「揺れる『男の仕事』『女の仕事』 —— ポスト社会主義期ブルガリアの農村女性たちの経験から」中谷文美・宇田川妙子(編)『仕事の人類学 —— 労働中心主義の向こうへ』47–69. 京都: 世界思想社.
- 松前もゆる. 2017. 「複数の場所を生きる —— ブルガリアからイタリアへのケア・家事労働者の国際移動に関する試論」『盛岡大学紀要』34: 11–22.
- Matsumae, Moyuru. 2018. Bulgarian migrant women and their life courses: The case of care workers from Bulgaria to Italy and Greece. *Ethnologia Balkanica. Journal for Southeast European Anthropology* 21: 253–266.
- 小ヶ谷千穂. 2007. 「国際移動とジェンダー —— フィリピンの事例から」宇田川妙子・中谷文美(編)『ジェンダー人類学を読む —— 地域別・テーマ別基本文献レビュー』240–259. 京都: 世界思想社.
- 大川真由子. 2016. 「序 帰還から故郷を問う」『文化人類学』80(4): 534–548.
- Parreñas, R. S. 2015. *Servants of globalization: Women, migration, and domestic work*. Second edition. Stanford: Stanford University Press.
- Sassen, Saskia. 2000. Women's burden: Counter-geographies of globalization and the feminization of survival." *Journal of International Affairs* 53(12): 503–524.
- 佐藤齊華. 2015.『彼女たちとの会話 —— ネパール・ヨルモ社会におけるライフ/ストーリーの人類学』東京: 三元社.
- 高谷幸. 2018. 「現代日本におけるジェンダー構造と国際結婚女性のシチズンシップ」安里和晃(編)『国際移動と親密圏 —— ケア・結婚・セックス』49–77. 京都: 京都大学学術出版会.